
未来探偵

鎌学 文芸部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来探偵

【Nコード】

N7971C

【作者名】

鎌学 文芸部

【あらすじ】

ひよんなことから知りました。それは、私の運命だったのだと思います。未来探偵。彼らは、本当に未来を知っていました。

ひよんなことから知ったのです。はじまりはゴールデンウィーク中に家族三人でキャンプに行ったときの事でした。

準備に手間取ってしまい、出発したのが正午過ぎ。高速道路に入って、しばらくの間はスイスイと進めたのですが、日が暮れるにつれて車の量が増してきました。それに伴い、私達の車はなかなか前には進めていません。とうとう息子の誠は寝入ってしまい、運転している誠二さんの横顔からも疲労が察することができました。

「ねえ、もう睡眠とらないと持たないわよ」

心配して私が声を掛けたのですが、誠二さんは少しの間をにおいてハッと目を覚ましたかのように、

「え？何か言った？」

と聞き返してきました。もう限界なのだど誰だってわかります。

「パーキングまで結構距離あるし、いつそ高速降りちゃおうって言ったの」

「ああ。うん、そうしようか」

すぐに誠二さんは承諾して、私達は高速道路を降りました。

降りたところは静かな田舎でした。古い建物がいくつも並ぶ路地に入っていく、その路地の邪魔にならないような場所に車を停めました。窓を開けると、暖かい風と静けさが私を包み込みます。無用心にも、窓を開けたまま私はいつの間にか寝入ってしまいました。

起きたのは六時をすこし回った頃だったと思います。目を開けると、眩しいほどの日光が私の視界を埋めつくしました。日光をさえぎるように手を前に出しながら車の外に出ると、すぐそこに駅が見えました。木造の小さな駅舎のまわりにはもちろん一人見つかりません。さみしくたたずんでいました。しかし、私にはそのさみし

い駅はどこか懐かしく感じられました。

私の実家は東北にあります。小さな小さな町で、東京とくらべたらとっても不便で、それでもどこか居心地がよくて。そんな故郷に似たような雰囲気から漂ってきました。

私は車のトランクにあるカバンから着替え用の大きなバッグの中からタオルと洗面用具を取り出し、駅のトイレに向かいました。

こんな朝早くだからでしょうか。駅にも、駅前にも、人っ子一人いませんでした。

人がいないというのは不気味です。聞こえるのは風の吹き向ける音と私の足音だけでした。私は早足でトイレに向かいました。

洗面をすませてトイレを出ました。私がふと改札の方を向くと、さつきまで誰もいなかった改札の前には一人ティッシュがたくさん詰まっている箱を横に置き、手元にティッシュを持った人が立っていたのです。

正直、すこし警戒してしまいました。なにせこんな朝方に、こんな田舎で、こんなにも人がいない駅の前で、ティッシュ配りをしているのです。不審者じゃないかと慌てました。

それでもティッシュを貰いに行こうと思ったのは運命だったのでしょうか。いつも配っているティッシュはどんなときも受け取っていました。声をかけられなくても自分から貰いに行き、何度も往復してたくさん貰ったりして誠二さんに呆れられた時もありました。

ティッシュを配るその人は黄色の蛍光色の服を着て、同色の帽子をかぶり、まるで誰かを待っているかのようにあたりを見回していました。

私が近づいていくと、気付いたのか私の方を見て微笑みました。よくよく顔を見てみると二十代前半の若い男性ということにはわかりました。

「はい、どうぞ」

渡されたティッシュの広告には太い字で「未来探偵」と書かれています。

「未来……探偵？」

誰だつて不思議に思うでしょう。私は太字のあとを続けて読みました。

本社ではあなたやご家族、お知り合いの方々の未来を調べ、迅速かつ正確にお伝えします。いつ事故や病気に遭うのかや、浮気、不倫等がいつ起こるのかを調べることができるのです

私が信じられないという顔で青年の方を向くと、彼は微笑みながら言いました。

「当社はどんな他社よりも格安になっております。黒字の電話番号に掛けていただき、この口座に電話でお伝えする金額を振り込んでいただければ……」

振り込め詐欺なのではないか、と思ったのは当然のことだと思います。でも、料金は数千円。詐欺にしては金額が低すぎます。では、本当に……。

「ほ、本当に未来がわかるの？」

そう言つと、青年は満面の笑みを浮かべて答えてくれました。

「はい」

しかし、そんなに言われても実際にやってもらわないと信じることはできません。

「あのう、どうも信じられないんですけど、一回だけ無料でやっていただけないでしょうか」

私が彼に頼むと、彼は私に背を向けて携帯電話で話し始めました。その会話が終わつてこちらを向くと、「一回お試しとして」とまた微笑みながら言ってくれました。

「では、調べてほしいことがあれば電話をください」

そう言い残して、彼はティッシュの箱と共に去っていきました。しばらく私はぼんやりとティッシュの太字を眺めていましたが、誠二さんと誠を車に残していることを思い出して慌てて車に戻りました。

2 (前書き)

もうすこし続くのでぜひ視てください

初めて使ったのはキャンプ中のことでした。

夜、私はなかなか寝付けませんでした。地面はごつごつとしていて、寝袋の上からでも寝心地がよくなかったですし、おまけに虫の鳴き声がうるさいのです。誠二さんも誠も遊びつかれてすぐ寝てしまい、寝付けないのは私だけでした。

居心地が悪くて寝返りをうつと、視界に入ってきたのは、カバンのポケットからはみ出ている、今朝貰ったティッシュでした。手にとってよく見てみると、電話番号が書いてあります。

起き上がってテントの外に出て、ポケットから携帯電話を出して番号を入力しました。

まわりにも数個テントが立っていて、まだ外で話をしている人もいます。五月の暖かい風が私の体を通り抜けていきました。

通話ボタンを押し、ルルルルと発信音が聞こえてきます。なかなかつながりませんでした。あきらめて終話ボタンを押そうとしたとき、

「はい、おまたせえ〜いたしました。未来探偵本社でえ〜ございます。会員ナンバーをどうぞお〜」

男の声でした。変な所で伸ばすので聞き取りにくかったのですが、そんなことより会員登録なんて聞いていません。ティッシュにも書いてありませんでした。

「あの、まだ会員じゃないんですけど……」

「あ〜。ではあ〜、お名前とす〜ぐ〜に連絡のつ〜く電話の番号をお〜おねがい〜します〜」

私は自分の名前と携帯電話の番号を伝えました。すると「あ〜。

あなた〜でえ〜すか」となにか納得して、言葉を続けました。

「では、ナンバーを覚えてくだあ〜さい。MN0001です〜」
私が初めてのお客となった瞬間でした。別にほとんど何も変わりはないのですが、最初というのはどこか気持ちよさというものを感
じました。

「ではあ〜、さつそくう〜依頼のお〜ないよ〜ですがあ〜」
そう言われて気付きました。特に何も考えないで、ために電話
してみただけなのです。しかし、初回は無料なのですから、何かし
ら適当なことを頼んでみようと思いました。本当に未来がわか
っているのかも、まだ信じてはいませんでした。

「じゃあ、一番近いうちに起こる事故を調べてください」
結局思いついたのはこれだけでした。と、言っても一番心配なこ
とです。家族がどんな事故に遭ってどんな状態に陥るのか。誠二さ
んが、誠がいなくなったら私は生きていけません。そしてできるこ
となら阻止したいと思っていました。
「わかりい〜ました。ではあ〜、一週間以内に連絡い〜たしま
す」

電話が切れた後、私はしばらくその場に立っていました。
夜空を見上げてひとつ大きな息を吐くと、どこか気持ちがすつき
りと爽快になりました。寝床から「何かあったのかあ？」と誠二さ
んの寝ぼけた声が聞こえてきます。

「ううん。なんでもないの」
私は夜空に背を向けて、テントにもぐりこみました。

未来探偵から電話がかかってきたのは翌日の昼間でした。

一日中遊びまわれるこの日は川に行つて遊ぶことになっていま
した。山道を車で小一時間走っていくと、上流の砂場のあるスポッ
トに着きました。あまり大きな川でもなく、人がまわりにぼつぼつと
いるので、ここなら思い切り誠をあそばせることができると思いま

した。

「あんまり遠くに行っちゃだめよー」

車を降りてすぐに飛び出していった誠の背中に向かって私は叫びました。

「うん、わかってるっ」

誠二さんが誠と一緒に遊んでいる間、私は立てたパラソルの下、一人砂浜に座って二人を見つめていました。同時に昨晚の事を思い出している自分も一人ぼつんとさみしくたたずんでいるような気がしました。あの時、半信半疑ではありましたが、心のどこか隅ですっかり信じきっている自分がいるのを感じていたことを今でも覚えています。多分、不安だったのでしょう。

ふと気がつくと、そばにおいてあるカバンの中から携帯電話のバイブレーションが聞こえてきました。

こんな時に誰からだろうと思つて、さっきまで昨晚のことを思い出していた私は慌てて電話に出ました。案の定、相手は未来探偵からでした。

「報告は、我が社ではすぐにご本人に直接伝えることになっております。その際にまわりに誰もいないか、音が漏れていないかを確かめて下さい」

確かに私からしてみれば他人に家族の未来を、しかも不幸な未来を聞かれたくありません。でも、ここまで嚴重にする必要があるのでしょうか。

「はい。問題……ないです」

少し疑問に思つたものの、その時は気にしないことにしました。

「ではご依頼の件ですが……」

心臓がバクバクとなつてしまい、つい胸に手を当ててしまいました。た。

「息子さんの誠くんですね」

本当に心臓が跳ね上がったかと思いました。私が未来探偵の人と接触したのはあのティッシュをもらったときだけ。息子を見たわけ

でもないし、それに名前まで知っているなんて。

「本当に未来が見えるんですよ」

私の考えを見透かしたように、電話の向こうの男は言いました。

「そ、それで？」

「五月四日午後二時四分五十八秒に、お子さんが溺れて意識不明の重体になりますが、幸いなことに一命は取りとめます」

四日。今日のことでした。慌てて腕時計を見てみると、まだ針は一時二十分をさしています。

これで災難を防げる、そう思って肩の力が一気に抜けました。

「質問等はありませんでしょうか。答えられる範囲で応答いたします」

「いえ……ありません」

言葉に力がこもってないのは言っている私自身感じられました。

「わかりました。今回は初回限定サービスとして無料にさせていただきます。次からは先日お配りしましたティッシュに記載されています」

動揺していて、それから先の説明は上の空でした。

二時ギリギリに昼食を理由に二人を呼びました。あらかじめ用意していたカップ麺にお湯を注いで三分待つだけ。食べている間に事故の起こる時間は過ぎてしまっただろう、と思っていました。

「もう三分経つたろ。誠、食っていいぞ」

誠二さんが防水機能付きの腕時計を見ていいました。この腕時計は以前私が誠二さんに送った誕生日プレゼントです。結婚前に送った時計をいまだはめてくれて、私に私に私はすこしだけ照れていました。

「もういいや。ごちそうさま」

そんな声が聞こえて、振り返ったときにはもう誠は川に入る寸前でした。

「ま、まってー！」

慌てて呼びかけたので声が裏返ってしまい、誠の耳まで届かなか

ったのでしよう。どんどん川の方へ行つてしまいます。私は裸足で駆け出しました。誠を助けることだけしか考えられませんでした。

視界がぶれました。わけもわからないまま、私は砂浜に倒れこみました。ジンジンと倒れた後につま先に痛みが襲ってきました。口に砂が入りました。

今度は視界がぼやけました。そして涙が頬をつたつて落ちていくのを感じられました。

遠くで息子の叫びが聞こえました。

私は何もできない。何もしてやれない。一体何をしているんだろう。

つま先の痛みはもう感じられませんでした。

3 (前書き)

書き忘れていましたが、かなり前に書いたものなので、かなり文章的におかしいものなどありますが、話の流れがおかしいとか、こっちのほうがいいんじゃないかとか、そういう指摘をしてもらえれば助かります。

定期テストで少し更新が遅れましたが、あと少しで終わりますので、最後まで見ていただけるのであれば、よろしく願います。

目が覚めると、カーテンの合間からもれる薄い光が目の中に入ってきました。一瞬どこだか認識できなかったのですが、昨夜のことをすぐに思い出せました。

救急車で運ばれた誠は何とか一命を取り留めたものの、意識は回復しませんでした。何日も病室で看病していたのですが、誠の目は閉ざされたままで、さすがに疲労に耐えかねた私は、すぐ近くのホテルに泊まったのでした。誠二さんはゴールデンウィーク明けに重要な仕事があると言って帰ってしまいました。仕事をやってもらわなければ生活が成り立たないのはわかっているのですが、こういう状況でひとりになるのは寂しいものです。

結局、精神的な疲労と肉体的な疲労の両方が襲ってきて、部屋に入った途端に寝入ってしまったのでした。

ふいに、カバンから飛び出して床に落ちている携帯電話が鳴りました。ベットから身を乗り出し、手を伸ばして通話ボタンを押しました。

「誠、どうだ？」

誠二さんでした。その声を聞いた途端、胸の奥から何か熱いものがこみ上げてきました。ついに我慢できなくて、涙がいつの間にか頬をつたっていました。

「もう……、なつ何で……こ、こっ、こんなことに……」

「そうか……。わかった」

誠二さんはそれだけ言うとう電話を切ってしまいました。

誠さんのそっけない対応に、私は呆然としてしまいました。頼りになる、甘えられる場所があるから私は思いつきり泣けた。それなのに、その相手は冷たく去っていつてしまったのです。

同時に怒りがこみ上げてきて、とにかく暴れたくなりました。ベッドを思いつきり叩いたり、枕を壁に投げつけたり、カバンを蹴っ

たり。

そのうち、視界に携帯が入りました。そこで悟りました。
あの未来探偵とか言うやつらがわるい。

夢中で床に落ちていている携帯を拾い、力のこもった指で発信履歴を見返しました。

「はい……。未来探偵ですが……」

静かに、陰気な声で話し掛けてきました。

「あなた達、何様なの！」

迷惑になるなんてまったく考えていませんでした。とにかく自分が溜め込んでいるこの怒りをぶつけたかった、それだけでした。

「息子が、息子の意識がもどらないのよ！」

「ああ……。お気の毒なことに、以前申し上げた通りです……。それで何か……？」

淡々とした口調がまた私の怒りを誘いました。

「何かじゃないわよ！こんなになるなら阻止してくれてもいいんじゃないのー！」

「何を言っているんですか……。そんなことは契約にありません……」

「何言ってるのよ！それくらいしてくれないの？あなた達、人間として本当に最悪ね。あんな小さい子をこんな目にあわせておいて……」

相手は静かに、しつかりとした声で言います。

「私達は未来を見て、それをお客様にお伝えするだけにすぎません。変えることはできませんよ」

何も言い返せませんでした。

「もしまたご利用になるのであれば、その時はどうぞ……」

そう言っただけで切られました。受話器から終話を意味する電子音が聞こえてきます。

すべて私のいいわけでした。全て事故の責任を人に押し付けて、「私は何も悪くない」と言い張る。まったく、最悪最低の人間です。

笑ってしまいました。

私はなんて馬鹿なんだろう。

緩んだ口元で塩っ辛い涙を感じました。

誠が転院してきたのはすぐでした。一通り家事が終わったら病院へ行き、夜に仕事から帰ってきた誠二さんと一緒に帰るといふ毎日が続いたのです。

子供がいないと本当に家の中が静かになりました。いつも「うるさい」と叱っていたのに、今はそのうるさいと思う感情さえもが愛しく感じられました。

誠二さんはあれからすっかり元気をなくしてしまい、まったく言っていないほど食が進んでおらず、日に日にやせこけていく姿はとても痛々しいものを感じました。

「最近ちよつとふとつたんじゃない？」

一緒にお茶をしていた友人に言われました。

「そうかな」

「うん。食べすぎ？」

最近なにかとストレスが溜まっているのか、少々普段よりも食べ過ぎていられるのかもしれないとは、薄々自覚はしていました。そういえば、事故以来よくお菓子を食べるようになったのは事実です。

「誠くんはぜーったい大丈夫だって。ちゃんとご主人にも言わなきやだめよ」

察してくれた友人は優しく言うてくれました。

「うん」

ありがとう。長年つきあってるからか、恥ずかしくてそのたった一言が出ませんでした。

そんなやり取りがあったからかもしれません。病院へ行く前にへ

そくりを財布に詰め込みました。今日は夕食は外で食べよう。私のおごりで。元気が出てきました。妻として、あの人をしつかり支えなければなりません。辛いのはお互い様です。でも、いつまでもこのような生活を続けるわけにもいきません。

「がんばらなくっちゃ、ね」

ひとり呟くのはどこか寂しさを感じられました。

でも、近くには誠二さんがいてくれるんだ。だからここまでがんばってこれたんだ。そう自分を叱りつけました。

看病と言ってもただ長い時間、誠のそばにいるだけのことです。静かな病室には心電図の規則正しい音が響き渡り、それが私をますます不安にすることでした。

「大丈夫。ずっとママはそばにいるからね。ちゃんと応援してるからね。だから、誠もがんばるのよ」

目を閉ざした誠にそつと言葉をかけます。安らかに眠っている姿を見ていると、ふいに涙が一筋、私の頬を伝って落ちました。それにつられるように次から次へと涙がこぼれてきます。

知っていた。私は事故が起こることを知っていたのに、何もできずにただ見ていた、そう傍観していたのです。何てことでしょう。自分の息子がこんな目に会うとわかっていて、それでも阻止できなかった自分の無力さに、今ごろになって泣けてきました。

しばらくうつむいたまま、私はベッドに腰をおろしていました。カバンの中で携帯が振動しました。病院内なのに電源を切っていないことにやっと気付き、あわてて切ろうとしましたが、表示されていた名前を見てすぐに電話に出ました。

「ああ、俺だけど……」

待っていた相手。今、最も頼りになって、私がしっかり支えなければならぬ人。

「あ、今病院にいるの。ねえ、今夜いつしょ」

「今日さ、ちょっと上司に誘われちゃって、さ。帰り遅くなるから」

私の言葉を遮り、ささつと要件を述べて、誠二さんはきってしまいました。

多分、しばらく呆けた顔で固まっていたのだと思います。自分がどんな顔をしていたかなんて考えもしませんでした。最近こんなやり取りが増えたことが思い出されました。誠が生まれてから少し冷

たくなつたのを感じていましたが、特に最近冷たくなつてしまいました。

誠二さんは誠をものすごくかわいがっていて、ものすごく甘やかしていました。あれを親ばかと言うのでしょうか。それでも、誠に嫉妬する時もありました。考えれば考えるほど私はつくづく馬鹿な女だと思いました。

病室を出るときに一目誠を見て、それからコンビニの弁当を買って家で食べることにしました。その弁当はごくありふれた、でもしつかり身も詰まってる弁当でした。

私はがつつきました。何かが不満でした。しかし、何が欠けているかわからぬまま弁当は空になり、私はいつの間にか洋服のままベツドにもぐりこみました。

目の前に菜の花畑が広がっていました。まわりを見わたしても菜の花だけ。他にあるものといえば、茜色の空と月ぐらい。

はじめはとてもはしゃいでいました。というのも、一度こういうどこまでも広がる楽園のような花で埋め尽くされた場所に行つてみたいという幼い頃の夢があったからなのです。

しかし、それはよく考えてみれば、その時見て楽しむものなのでした。いつまでもいたいと思つても、長い時間見ていると、その悪さというものがわかつてしまい、途端に面白みがなくなつてしまふ。私の場合もそうでした。時間が経つにつれ、不安になつてきました。いつこの花畑を抜け出せるのだろうか、私はなんでここに来たのだろうか、どうしてこんな所にいるのか。

さらに時間が経つと、不安は恐怖に変わりました。菜の花がざわめきはじめ、茜色の空が闇に私を引きずり込もうとしてきます。

ふと後ろを振り向きました。いつの間にか、さつき私のいた場所が闇に覆われていて、どんどん菜の花畑を侵食してきました。

たまらなくて私は走り出しました。ときどき振り返ってみるたび

に、その間はだんだん私との距離を縮めています。

ついに、その間は私の体の半分を飲み込みました。それでも懸命に逃れようと思いました。でも、結局は息が切れてその場に倒れてしまい、全てをあきらめました。

もう、どうなってもいい。

一瞬そう心で思ったかと思うと、たちまち視界を闇が覆い尽くしました。

まぶしい日の光がまぶたを通して目の中に入ってきました。寝返りをうつても変わりませんでした。仕方なく、重たい体をなんとか起こして現状することができました。

そういえば、洋服のまま寝ちゃったんだっけ。

せつかくの服がしわだらけの汗だらけでした。

気がつけば、汗でぐっしょりと全身がぬれていました。さっきの変な夢のせいでしょうか。

そのまま風呂場に直行してシャワーを浴び、普段着に着替えました。

もう、深く考えないようにしよう。考えたってはじまらない。

私は考えるよりまず行動するところがあると友人に言われたことがあります。確かにくよくよするくらいなら、それを改善しようと思います。考えるだけ深みにはまるのなら、行動すればよいのです。そんな風に考え直しながらキッチンに向かう途中、体が椅子にぶつかって、かかっていた誠二さんのコートが落ちました。拾おうと思っただけで、どこか香水くさいように思いました。私の使っているものと違います。もっと高級な……。

慌ててコートのポケットを探りました。すると一枚の紙切れが床にはらりと落ち、同時にとてもきつい香水のにおいが部屋中に漂ってきました。

紙切れにはホテルの名前が書いてありました。割引券のように小さな紙切れで、私は手のひらにのせて、握りつぶしました。

両手がふるえ、自分では認識できない感情が浮いては沈みました。もうその時、何を考えていたか覚えていません。ただ、その状況を理解できていませんでした。

どのくらい経ったことでしょう。突然、どこからか曲が流れてきました。我に帰って、音源のポケットに手を入れて携帯電話を取り出します。手にとった瞬間に曲が途絶えました。着信履歴を見ると、友人の名前が書かれており、下のほうに「探偵」と書いてありました。

そうだ。探偵に聞いてみよう。何か、わかるかもしれない。

一度ためらったものの、どうしても感情がこみ上げてきて、胸が苦しくなってくるのです。

「では、要件を」

「これからの私達夫婦についてです」

「はい、かしこまりました。えー、では、五日以内にご報告させていただきます」

これでよし。もう、何も、考えないようにしよう。

そう思ったものの、あの冷たい誠二さんの態度を思い出してしまい、洗い物をしているときにお皿を一枚割ってしまいました。

暗い部屋に響くのは壁掛けの時計の秒針の音だけでした。

もう0時をとくに過ぎたと思います。私の目の前には電話機が置いてあり、椅子に座って私はずっと待っていました。

ふいに電話が鳴り響き、暗闇の中に点滅する光が現れました。

ゆっくりと手を伸ばし、受話器を静かに耳につけました。待つていたはずの電話なのですが、どうしてもその事実をどこかで否定していた心が行動自体を拒絶しているのを感じました。

「お、まだ起きてんだ」

相手の声は、誠二さんの、あの声でした。

「……いまだ」

「ちょっとさ、仕事が忙しくつて。今日は泊まってくよ」
よくドラマなんかにあるようなパターン。

「そう……」

わかっています、だいたいどんな場所にいるのかぐらいは。

「どうした？元気がないね」

「……」

もう、すべてわかってしまいました。つい一時間前にあの探偵から連絡が入ったのです。

受話器を静かに戻しました。そして、かすかにカーテンの間から漏れる月の光へ近づいて、ベランダに出ました。

簡単に言えば、これから誠二さんは私と別の道に行くことになっていました。

私は見捨てられるのです。

もう、何も考えません。考えることが無駄だから。どうせ捨てられるのなら。

疲れてしました。

夜風が生暖かく、月がきれいでした。つい先ほどまで雨が降っていたせいなのでしょう。ベランダから街を見下ろしました。煌々と光を放ち、騒音が響き渡り、まるで動物のように生きているような気がしました。真下には、ただ広がっているコンクリートがありました。すぐに楽になるでしょう。

両手に体重をかけ、両足が宙に浮いたと思うと、いつの間にか体はベランダの外にあり、風を切って落ちていました。

落ちていくとき、誠のことを思い出しました。意識がもどったらどうなるのでしょうか。誠二さんが引き取ってくれるのでしょうか。一瞬不安になりましたが、なるようになるでしょう。もう、どうでもいい。この世なんてなるようになるんだ。私一人が消えたって、世の中にとって大きな損害にもならない。

日常が、また、ただ、繰り返されていく。

そう思うとどこか胸が痛みましたが、もう私に関係のないことで

す。

地面につく寸前に少し、そうほんの少しだけ誠二さんの顔を思い出しました。

私は幸せだったのでしょうか。

彼に会って、結婚して、憧れだった東京に住んで、家事をこなし、特に趣味もなくなったただ時間が過ぎていったこの時間は、私にとって何か意味でもあったのでしょうか。

地面がかすんで見えなくなったと思うと、すぐに視界が暗闇に染まりました。

目が覚めると、ボクの隣には看護婦さんがいた。

「あつ」

ボクが目を覚ましたことに気付いて、あわてて病室を出て行くとすぐにパパが入ってきた。知らない女の人と一緒に入ってきた。

「誠つ！よかった……」

パパはボクの手を握った。暖かさを感じた。

「ちよつと痛いよ」

そういつとちよつと握った手を緩めてくれた。

「本当によかった」

そういえば、ママの姿が見えない。ボクがおぼれる直前に何か叫んでいたような気がした。もしかして、事故が起こることがわかっていたのかな。そんなわけないか。

「ママは？」

パパは少し困った顔をし、知らない女の人と顔を見合わせた。

「えつとな、ママは今ずっと遠いところへ出かけちゃったんだ。

もうずっと帰ってこないけどな、その代わりこの人がお前のママになつてくれるんだ」

知らない女の人にはこつと優しく笑って、よろしくねとボクに言った。

「うん」

よかった、優しそうで。怒りっぱなしのママよりずっといいや。いつの間にかそばにいたお医者さんは笑った。

「今のところ障害は見られないようですし、まあ、すぐに退院できますよ」

「ありがとうございます」

近くの窓から外の景色が見れた。道の脇の木はまだ緑だけど、もう蝉のうるさい声は聞こえなかった。

そうだ。借りてたゲーム、返さなきゃ。早く退院できたらいいな。思い切り伸びをすると、あくびも一緒にでてきた。

4 (後書き)

初めて書き上げた作品で、あまりできはよくないのですが、批判をいただけたらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7971c/>

未来探偵

2011年1月7日02時30分発行